

皆さん、おはよう。ここに来るのは久しぶりだ。ここに来られて本当にありがたい。

簡単な自己紹介

今日は、神の召しについて話したいと思う。具体的には、神がどのようにして個人を御自身に仕えるよう召されるかについてだ。まず第一に、今朝ここにいるあなたが信者であるなら、あなたは神に召されていると信じている。また、信者として、神が私たち全員に与えておられる一般的な召しがあるとも信じている……。例えば

マタイによる福音書 22:28-30

マタイによる福音書 16:24

ローマ人への手紙 12:1-2

マタイによる福音書 28:19-20

これらは、神がすべての信徒に与えられた基本的な命令、いわば召しである。しかし今朝は、神が個人を奉仕へと召されることについて見ていきたい……。具体的には預言者イザヤと、神が彼に与えた奉仕への召しについて考察し、そして今日、神がどのようにして同様の方法で人々を召し続けているのかを見ていきたい。

では、聖書をお持ちの方は、私と一緒にイザヤ書第6章を開いてほしい。イザヤ書6章1-4節

イザヤ書の新たな章——彼の奉仕への召命だ。

:1 ウジヤ王が死んだ年

ウジヤ（アザリヤとも呼ばれる）は、紀元前792年から740年までユダの王であった。

彼は一瞬の驕りによってつまずいたものの、全体としては長い治世を送った。ウジヤはわずか16歳で即位し、52年間統治した。全体として、彼は良き王であった。人々が頼りにする王だったのだ。

しかし悲しいことに、ウジヤの生涯は悲劇的な結末を迎えた。彼の生涯を見てみよ

う……歴代誌第二26章（意訳）

ウジヤは実に素晴らしく実り多い人生を送った……。しかし、その人生は悲劇的な結末を迎えた。

だから、「ウジヤ王が死んだ年」というこの一節を読むとき、それは私たちにとって単なる年代記以上の意味を持つ。

私はいつも、聖書に書かれている場面に自分を置き換えて想像するようにしている……。読んでいる内容をリアルにイメージするためだ。

それは本当に素晴らしい時代だった。成長の時代……国家として成功を収めた時代……この王は長く統治し……人々が頼りにしていた王であり……生活は順調だった。

しかし、ここで私たちは、悲劇的な最期を遂げた偉大な王の生涯の終わりに立っている。実際には、それは不確実な時代だったに違いない……。そして、この不確実な時代に何が起こるのか？

:1 私は主が王座に座しておられるのを見た

イザヤは、主が御座に着いておられるのを、自分自身の目で見たと語っている。

玉座に座っている真の王はただ一人だけだ。

真の王は常にただ一人しかいなかった。それはウジヤ王ではなく、常に主であったのだ。

これは幻である。

神の御座を見たのはイザヤだけではない。

エゼキエル、エレミヤ、ダニエル、ダビデ、そしてもちろんヨハネも、みな幻の中で神の御座を見た。

しかし、イザヤは玉座に坐す主を見た。なぜこれが重要なのか.....。

イザヤはおそらく、ユダの偉大な指導者がもはや王座にいないことに落胆していたのだろう。

そこで神は何をなさったか。神はイザヤに示された.....ウジヤはもはやエルサレムの王座にいないが、私は私の王座におられるのだと。

ポイント1 イザヤの召命において最初に目にするのは、彼が主をそのお姿のまま——すなわち、御座に坐す王として——見たということだ。

:2 その上にはセラフィムが立っていた

神の御座を取り囲んでいるのは、ここではセラフィムと呼ばれる天使たちだ。他の多くの箇所では、これらの天使はケルビムとして知られている（詩篇80:1、イザヤ書37:16、エゼキエル書10:3）。また、黙示録4:6-11では「四つの生き物」とも呼ばれている。聖書の中で、これらの存在がセラフィム、文字通り「燃える者たち」と名付けられているのは、この章だけである。

:2 それぞれが六つの翼を持っていた。二つは顔を覆い、二つは足を覆い、二つは飛ぶために使っていた

ヨハネの黙示録4:8

スポルジョンは、この6つの翼について興味深い見解を示している

「つまり、彼らには礼拝のための翼が四つ、活動のための翼が二つある。四つは身を隠すため、二つは奉仕に専念するためである。そして我々は彼らから、神の御前にあって最も深く畏敬の念を抱き、謙虚であるときこそ、神に最善の奉仕ができるということを学べるのだ。」

:3 聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主

天において、神の御前で、私たちはこのリフレインをしばしば耳にする。神は聖なる方だ。

聖なる——qadosh——神聖、聖なる、聖別された。

神は私たちとは違う。神は完全に清く、完全に汚れがなく、罪とは全く無縁である。神の聖さはしばしば「光」として描かれている。

ヨハネの手紙一 1:5

なぜ天使たちは「聖なる」を三度繰り返すのか。それは、一つの神の中に三つの位格があるからかもしれない。あるいは、神の聖さを可能な限り最高レベルで宣言するためかもしれない。

:4 叫ぶ者の声によって、門の柱が揺れた。これは幻だが、イザヤは見るだけでなく、感じているようである。

:4 家は煙で満たされた

これは神の栄光の物理的な現れである。

モーセの時代、幕屋が最初に設けられた時、それは雲で満たされた。出エジプト記40:34-35

ソロモンが神殿を建てた時、そこもまた煙に満たされた

歴代誌第二 5:13-14

イザヤ書 6:5

二つ目にわかることは、イザヤが自分自身をありのままの姿、すなわち値しない者であると「見た」ということだ

5 ああ、私は滅びた。私は滅びた。

人が真に神の御前に立つとき、まさにこのようなことが起こるのだと私は信じている。彼らは神の強烈な光の下に置かれ、自らの欠点を痛感するのだ。神は聖なる方であり、私はそうではない。神の御座のこの幻は、イザヤに温かみや安らぎを与えたわけではないことに注目してほしい。主をはっきりと見るほど、自分がどれほど悪い存在であるかをはっきりと悟ったのだ。これは聖書全体を通して共通している。

ヨブ記第42章、ダニエル書第10章、ヨハネの黙示録第1章に登場する人物たちは皆、同様の体験をした。イエスが漁師たちに網を下ろすよう命じ、彼らが莫大な漁獲を得た時でさえ、ペテロはイエスが聖なる方であり、力ある方であることを悟ったのだ。

ルカによる福音書5章8節

これこそが真の礼拝の一部である。

:5 わたしの目は、万軍の主である王を見たからだ

イザヤは義になかった、敬虔な人であった。しかし、王座に着かれた王、万軍の主を見たとき、彼はそれに比べて自分がどれほど罪深い存在であるかを知ったのだ。

1節には「主（アドナイ）」という言葉があり、3節と5節には神の御名である「主（YHWH）」という言葉がある。ヨハネがこれについて何と言っているかに注目せよ。

ヨハネ12:41

イザヤ書6章6節

次に目にするのは、イザヤが清められたということだ

6 セラフィムの一人が私のところへ飛んできた

これらの天使たちはイザヤに仕えた。一人が燃えさしを携えてイザヤのもとへ飛んできた——つまり、その炭は依然として熱く燃えていたのだ。それはあまりにも熱く、天使でさえ祭壇の火箸を使わなければならなかったほどだった。

:6 燃えさし……祭壇から

この炭は「金の祭壇」、すなわち香の祭壇から取られたものだ。そこは祈りの場所であった。

それは至聖所のすぐ外側にあった。御座は神のためのものである……そこが神が統治し、支配する場所だ。祭壇は私たちのためのものであり、そこが私たちが罪からの清めと浄化を得る場所である。

私たちの祭壇は十字架だ

:7 あなたの不義は取り除かれた

これもまた、礼拝において起こるべきことである——私たちは単に罪の自覚を得るだけでなく、清めも受けるのだ。

イザヤ書 6:8-13

4つ目に挙げられるのは、実は3つのことだ……イザヤは問われ、答え、遣わされる

:8 誰を遣わそうか。誰が我々のために行くのか。

ここで神は問いかけをしている。神は遣わすべき人を探していた。神は誰かが行くことを望んでいた。神が人を求めたのは、神が人々に触れたいと願っており、そのために進んで行く人々を通して触れたいと願っていたからだ。今日でも同じことだ。

:8 ここにいます。私を遣わしてください

神は人を探しておられる。なぜなら、神は世界に届きたいと願っておられるからだ。神は別の方法で世界に届くことができるだろうか？

イザヤは、神の問いに対する答えになりたかった。あなたはどうか

。

:9-10 この民の心を鈍らせよ

9節と10節は、新約聖書の中で6回引用されている。

(マタイ13:14-15、マルコ4:12、ルカ8:10、ヨハネ12:39-41、使徒28:26-27、ローマ11:8)

まるで神が、この人々を滅ぼすために、彼らが変わらないことを望んでいるかのように聞こえるかもしれないが、神の心は人々が悔い改めて救われることにあると私たちは知っている。これは真理を望まない人々についての話だ。だから神は彼らを助ける。神は彼らに真理を送るが、彼らはそれを何度も拒み、ついにそれに対して心が硬くなるのだ。

。

:11-13 主よ、いつまでか。

この人々はいつまで盲目であり続けるのか。イザヤはいつまで説教を続けなければならないのか。人々は、その地から追放される時が来るまで、神に対して反抗し続けるだろう。私たちは今日、神に同じ問いを投げかけるかもしれない。

ローマ人への手紙 11:25

イザヤの務めは、たとえ人々が耳を傾けなくても、説教し続けることだった。

8節で、神がイザヤを奉仕へと召されたことがわかる……しかし実際には、神の召しはこの章全体を通して見られるのだ。

今日でも同じだ

まず彼は神を見た.....御座に坐しておられる神を次に彼
は自分自身を見た.....罪深い自分

そして彼は清められた.....罪深い自分を主のもとに持ち寄り、清められよ
そして彼は招かれ、応答し、遣わされた